

論文審査の結果の要旨

欧米の精神保健医療福祉は、その実践の場を既に地域に移行しており、わが国でも入院中心の精神医療は、地域への移行が推進されている。そのような中で精神科訪問看護が重視され、当事者のその人らしい生き方を支えるリカバリーが目指されている。

本研究は、精神科訪問看護における文化的感受性を備えたリカバリー志向の看護援助モデルを構築し、それを訪問看護師に活用してもらい、看護援助モデルを精練したものである。その結果、6つの構成要素と3つの文化的感受性を備えた看護援助モデルを完成させている。

予備審査においては、精神看護学領域の研究として価値があり、これまでの学生の取り組みがベースとなった貴重な研究であると評価された。博士の学位に相応しい研究であるが、論文としてさらに洗練できる部分として、以下の点が指摘された。

- ① 文献検討では、文化と看護文化について概念を明確にすること。
- ② 考察では、「専門性を差し控える態度」が高度な専門性であることを強調すること、またオープン・ダイアログの実践と共通する部分があるため、その点を追加すること。
- ③ 既存の看護モデルに、本研究結果をどのように役立てることができるかを追加すること。
- ④ 権力や知によってケアの秩序が強化されている精神科看護の中で、患者のリカバリーとともに看護師がリカバリーしていくことについて、倫理的ジレンマの研究の観点も加えて考察すること。
- ⑤ 我が国の精神医療システムの中で働いている看護師にとって、精神医療の現状を俯瞰することには葛藤を伴う。こうした看護師の葛藤に対して、本看護援助モデルをどのように役立てることができるか、またどのような研修が準備されるべきかを考える必要がある。

最終審査では、提出論文において上記の予備審査での指摘内容が全て必要十分に修正されたことを確認した。その上でさらに「専門性を差し控える態度」、「看護師のリカバリー」について追加、修正することを求めた。このような指摘の一方で、本研究は精神科訪問看護における文化的感受性を備えたリカバリー志向の看護援助モデルを構築し、その具体的内容を可視化した点、さらにモデルを通して精神科訪問看護の専門性を明確化した点に、独創性が認められ、看護学への貢献度も高いと判断した。

以上により本論文は、学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定した。